「ひきこもりの国」のクライシス

マイケル・ジーレンジガーさん

another eye

「日本には自分の部屋を出ようとしない“ひきこもり”と呼ばれる人たちが、100万人もいるというのは本当ですか？　その人たちはどうしてそんなことをするのですか？」——外国人にこのように質問されたら、あなたはどう答えるだろう。
日本人にも容易には答えられないこの疑問に挑み、広範で周到な取材を重ねて『ひきこもりの国』を執筆したのが、アメリカのジャーナリスト、マイケル・ジーレンジガーさんだ。マイケルさんに、ひきこもりが象徴する日本の精神的クライシスについて考えをうかがった。

なぜ“ひきこもり”について書いたのですか？

私はいわゆる「日本人論」は信じていませんが、日本は確かに珍しい、複雑な社会だと思います。私は80年代より、日本経済や社会に注目してきました。96年から日本に駐在しましたが、きっとバブル崩壊から復活するだろうと期待していました。が、それがなかなか起きなかった。明らかに古いシステムが機能不全に陥っているのに、市民によるデモンストレーションすら見られない。経済革命や政治革命が起きないのは、興味深いことだと思いました。

そのうちに、復活が果たせないのは、日本社会と変わりゆく世界の相互作用なのだと気づきました。グローバル化が進み、開いたシステム、共通の基準、国境を超えた水平協力関係が当たり前になってきました。ところがそれは、従来の日本専用の閉鎖的システムや、大企業の垂直統合型組織とは対極をなすものです。また、インター ネットのような技術により、個人の創造的表現活動はずっと簡単になりまし た。でも「たとえ個性を殺しても、他のみんなに合わせることを重んじる」日本社会には、そうした流れと相容れない面があります。日本の中ではうまくいってきたことも、21世紀の国際社会では機能しなくなってきたように見えました。

ひきこもりは、そうした問題を象徴していると思ったのです。社会の硬直性、異論を唱えることの困難さ、過剰なまでの集団への適応など、自分が疑問に思い、指摘しようとしていたことにつながるドアだと感じました。

ひきこもりは、極めて日本的なシンドロームだそうですね。

多くの医師はそう述べています。でもこれが実際に日本特有のことなのかどうかは、もっとリサーチしてみないとわかりません。おそらく他の文化にも通じる要素はあるだろうと思います。

どの社会にもその社会特有の苦悩があり、多くの場合それが社会システムそのものに由来していることを考えれば、ひきこもりという現象について調べていくうちに、現代日本とそこに広がる憂鬱な気分とつながる、より深い真実に触れることができると直感したのです。

そのようにしてリサーチしていくうちに、アイデンティティやお守りとしてのブランド崇拝、生活のための結婚出産を拒否する子宮のストライキ、鬱な中年サラリーマンと根深いアルコール依存など、様々な問題がつながっていきました。

マイケル・ジーレンジガー
Michael Zielenziger

米カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所客員研究員。マイアミ・ヘラルド、フィラデルフィア・インクワイアラー、サンノゼ・マーキュリーなど日刊紙三十数紙を保有するナイトリッダー社の東京支局長を7年間務めた。その前はサンノゼ・マーキュリー紙の環太平洋地域担当特派員として活躍、1995年には一連の中国に関する報道で、ピュリツァー賞の国際報道賞の最終候補となっている。

日本に生まれていたらひきこもりになったのでは、と思うアメリカ人はいますか？

アップルコンピュータを発明した、スティーヴ・ウォズニアックです。十代のころは友だちも少なく、コンピュータチップや部品で遊んでばかりいる、典型的な機械オタクでした。でも父親は「そんなことやってないで、外で他の子と野球をしてこい」とは言わず、「そうか、お前はチップが好きなのか。じゃあお父さんがオシロスコープ（電気計測器）を買ってやろう」とよいところを伸ばしたのです。今のアップルがあるのはそのおかげです。

私はひきこもりの相当の割合の人は、もしも励ましを得てのびのびとしていられたら、似たような影響を日本にもたらすことができたのではないかとみています。ひきこもりの若者の多くは、頭がよく、繊細で、きちんと自己認識ができています。ただ、彼らが経験している社会では表立った反抗は容認されないので、内側に逃げるしかないのです。日本では仕事に追われて、子どものことは母親に任せきりの父親が多い。憂うべきことです。

日本のアニメがアメリカでも流行しているのは、アメリカの子どもにも、似たような感性があるからでしょうか？

社会になじめず疎外感を感じるといった類のプレッシャーは、両国に存在しています。でも若さゆえの苦悩や怒りといった感情自体は感じられても、日本人のそれがどこから来ているかはアメリカ人には理解できないでしょう。なぜならアメリカの若者は小さいころから、「自分の足で立ちなさい。自分で考えなさい。みんなと同じではなく自分らしくありなさい」と教えられている。日本の子どもが教えられている「みんなと同じようにして、ひどく目立たないようにしなさい」というのとは反対です。

いじめについて取材していた時、ハローキティが嫌いだった子どもが、キティのグッズを持っていなかったために学校でのけ者にされた話を聞きました。アメリカの学校でもいじめは起こりますが、母親は「学校に行ってこんなことがないように話してくるわ。人と違うのはあなたの権利だから」と言う。日本の母親はまず、「一体何をしていじめられたの？」と聞くそうです。

日本は、個人であるというのはどういうことなのかについて、しっかりと話し合う必要があると思います。

あなたの本を読んだ日本の若者からの質問です。「思っていることを正直に言えて、言い争いではない自由な対話ができる環境を作るためには、家庭や学校や企業はどうあるべきでしょうか？」

難しいけれど重要な質問ですね。日本では語られないことも多く、日本人は暗黙のルールの中で育ちます。あいまいとか腹芸ということは美しいコンセプトではありますが、21世紀の国際社会では、それはコミュニケーションとして十分ではありません。家庭や学校、企業は、「異なる意見を認めて、オープンで透明度の高い対話を実行します」と明言する必要があります。そして実際に変わった意見が出たら、たたいたり足をひっぱったりせずに尊重しなければなりません。

もうひとつ、人々に異なる選択肢を認めることです。東大に行きたくない人だっているし、行く必要もないのです。「大卒で就職して2、3年で仕事を辞めたら、雇ってくれる企業がなくなってしまうかも」という社会は奇妙です。日本に必要なのは、失敗を許容するシステムです。起業の聖地、北カリフォルニアで私が学んだのは、失敗は成功する方法を教えてくれるということです。仕事がなくなるのを恐れて、40年間も我慢して同じ会社に務めていたら、それは人の魂を破壊しますよ。

WEB

http://www.shuttingoutthesun.com/

BOOK

ひきこもりの国

なぜ日本は「失われた世代」を生んだのか

M・ジーレンジガー /著　河野純治/訳
1,890円（税込み）
光文社

日本は先進国にしては驚くほど精神科医やセラピストが少ないことも、言及されていますね。

セラピストが少ないのは、日本医師会の利害といった理由があるでしょう。米国には『Dr.フィル』など、カリスマティックな専門家が人間関係や心の問題について、心理学的な見地から教えるテレビ番組があり、よく視聴されています。私がアメリカのラジオ番組に出た時に、視聴者から「悩んでいる日本人の友の力になりたいのだが、自分の心の状態を理解するための言葉すら持っていないようだ」と相談がありました。

「痛まなければ変える必要がない」と精神科医は言いますが、社会も同じです。みんなに仕事があって裕福な時は、感情を抑圧するのが簡単です。でもここ10年ほど、日本はデフレ、ひきこもり、高い自殺率などの問題が悪化しています。うまく機能せずに痛んでいることは、変えなければいけません。

でも日本のシステムはとても緊密に絡み合っているため、ひとつ外せば全体がうまくいかなくなってしまう。だからこれをやれば全体がよくなるといった解決策はなく、あらゆる範囲にわたって物事を変えていく必要があります。しかもどれを先にやればいいかも明確ではありません。残念ながら、単純な解決策はありません。

たいへん考えさせられる、また耳の痛い内容だけに、本の内容に対して批判もあったのではないですか？

日本人からの感想は二つに分かれます。ひとつは「よくぞ書いてくれた。ありがとう」というものです。もうひとつは「そんな話は聞きたくない」と耳をふさぐものです。「反日的だ。米国が一番だと思っているんだろう」という意見もみられました。そんなことは一言も書いていませんし、私は日本が大好きです。

日本政府はひきこもりの問題に対してとてもアンビバレントで、どれくらい深刻ととらえるべきなのかも決めかねているようです。ですから私の本は「さぁ目を覚まして。これは問題ですよ」と伝える意図で書きました。

経団連で講演した時に、「日本はあなたの国です。私は外国人ですが、もしも自分が大企業の役員だったら、自分の国のことが心配です。みなさんはこういう問題に真剣に取り組むべきです。どうか国内で対話をもってください」と話しました。どれだけ伝わったかはわかりませんけれど。

Text by：スマキ ミカ